

●次の文章は、高田郁著「ムシヤシナイ」の一説である。読んで、問に答えなさい。

秋元路男は、定年後、駅でうどん屋を営んでいる。ある日東京から孫の弘晃（ひろあき）がやってくる。家出をしてきたのである。（紙面の関係で、改行をしていないところがある。）

弘晃が、オレ、と掠れた声を絞り出した。

「オレ、親父を殺すかもしれない」部屋の空気が一瞬、薄くなった。弘晃が苦悩の果てにその台詞を口にしたことが容易に察せられて、路男は敢えて無言のまま、真剣な眼差しを孫へと向けた。弘晃は右の拳で唇を覆い、くぐもった揺れる声で打ち明ける。

「目の前に包丁があると、親父を刺しそうな気がして息が出来ない。いつか時分で自分をコントロール出来なくなる。そしたら・・・」弘晃の肩が、上腕が、小刻みに震えだした。（略）

「ジイちゃん、オレ・・・自分が怖い」恐くて堪らない、と言葉にすると、弘晃は両の掌を開いて顔を覆った。

路男は、弘晃を夜中のうどん屋に連れて行き、包丁の握り方を教え、大量のネギを切るように言う。

必死の形相で、弘晃は包丁を握り締めて、ネギを刻む。ざく、ざく、ときこちない包丁遣いは、しかし、暫くすると、さく、さく、と徐々に柔らかな音へと変化していった。それにつれて、弘晃の身体の強張りは取れ、表情も少しずつ穏やかになっていく。

「いくつもの塾をかけ持ちして、実力以上の中学に受かった。けど、入ってみたら秀才がゴロゴロ。授業についていくのがやつとだった」路男はただ無言で、孫の打ち明け話に耳を傾ける。「親父には努力が足りない、と殴られてばかり。でも、足りないのは努力じゃなくて能力だったんだ。三年通ってそれが身に沁みた」（略）さくつさくつ、という包丁の音は、何時しか、とんとんとん、と軽やかな音色へと育っていた。俎板の上で包丁がリズムカルに踊り、正確な厚みでネギが刻まれていく。用意したネギの束もそろそろ尽きようとしていた。「仰山できたなあ、おおきにな、弘晃」（略）孫に手を差し伸べ、弘晃の右手を包丁ごと、自身の両の掌で包み込む。包丁の刃先が路男の腹を向いているのを知り、弘晃は怯えた目で祖父を見た。「弘晃、お前はもう大丈夫やぞ」逃れようとする孫の手をしつかりと握ったまま、路男はぎゅつと目を細めてこう続けた。

「包丁は、ひと刺すもんと違う。ネギ切るもんや。この手えが、弘晃の手えが覚えよつた

*傍線部で、路男が「もう大丈夫」という訳を波線部を参考にして説明しなさい。

①「ひと刺すもん」と「ネギ切るもん」とは、包丁の意味の捉え方にどのような違いがあるのか、対比して、考えを述べなさい。

②路男が「大丈夫」だという理由を答えなさい。

*強張り＝（ ）り 怯える＝（ ）える 掌＝（ ）

●次の文章は、『「科学の言葉」と「国語の言葉」』というエッセイの一節である。読んで、問に答えなさい。筆者は神戸大学大学院教授 中屋敷 均さんである。

最近の生命科学分野における進展は目覚ましく、そういった興味深い知見を分かりやすく、広く社会に知らしめるニーズは、間違いなくあるのだと思う。しかし、それに応えようとする理系研究者の数は驚くほど少ない。それにはいくつかの理由があり、最大のものは一般書を書くような時間と余裕がないし、書いたところであまり評価されないという現実だが、もう一つは科学の世界で使われる言葉が、一般社会あるいは国語の世界で使われる言葉と少々違うという問題である。

「科学の言葉」にとつて、大切なことは論理性や正確さである。一つ言葉は一つの概念を指すようにして、曖昧さや行間を読ませるような表現は、法度である。また、論理に穴があつてはいけなくて、ややこしくてもいろんな場合分けをして、すべての可能性を網羅するにしなければならない。情報として意味があり、それを正確に理解できる形になっていることが大切で、文章として理解しやすいかどうかは二の次である。(略)言葉としていかに退屈でも、そこに有用な情報が正確に書いてあれば、それで十分なのだ。

しかし、科学の世界を離れて世間に出れば、そんな「言葉」はなかなか通用しない。(略)だから専門書ではない、より広い読者を対象にした一般書では、「科学の言葉」をそのまま使うのではなく、どこか「国語の言葉」への翻訳が必要となってくる。(略)

「国語の言葉」にしようと思えば、作者は自分の見たものの中から取捨選択を行い、起承転結をつけてお話にするような作業をすることになる。「それは恣意的な創作だ!」と非難されれば、それはその通りである。「正確さ」を削る痛みと向き合わなくなれば、それは作者の堕落である。ただ、そこに拘り過ぎては、結局、言葉を平易にした専門書にしかない。読者に伝えるべき本質だと、自分がそう信じたことを選択することが「翻訳」には欠かせない。

そして、もう一つの「科学の言葉」の問題は、論理性や厳密な正確さを求めることでは表現できない題材がこの世には存在している、ということである。たとえば、人はなぜ生きるのか、といったことを理詰めで説明しようとしても、なんだか滑稽である。(略)人生や世界観や愛みたいな言葉を正確に定義できるだろうか。(略)

そういった「科学の言葉」が届かない、もつとやわからかで、曖昧で、人間にとって大切なことを語るために「国語の言葉」はあるのだ。

* 次の言葉の意味を調べなさい。

知見 () = ()

恣意的 () 的 = ()

* 拘り : () り

* 筆者は、自分の専門分野を一般書として書くときに、どのようなことが必要だと考えているか、答えなさい。

